

2 京都の鬼瓦

鈴木 久史

A はじめに

これまで京都府内では 65 遺跡から 182 点の鬼瓦が出土している。このうち、丹後国が 2 遺跡 2 点、山背（城）国が 63 遺跡 180 点である。なかでも、山背（城）国は、「宮都」が置かれたこと也有って、都城関連遺跡から出土した鬼瓦が 98 点を数える。京都府下出土鬼瓦のおおよそ半数が都城で使用されていたものである。ただ、これまでに報告事例が少ないこともあり、長岡京跡及び平安京跡出土鬼瓦を対象とした論考はほとんどない。このような中にあって、岸本直文氏が平安宮跡出土鬼瓦の中に、前都の鬼瓦に基づきながらも新たな鬼面文の鬼瓦が考案されたことを明らかにし、これらを「平安宮式鬼瓦」と呼称した¹。

一方、古代寺院においても、個々の鬼瓦の論考はあっても（新倉 1999）、京都府下全体の様相を把握したものは見当たらない。

そこで、本報告では飛鳥時代から平安時代中期までの鬼瓦を網羅的に把握することを目的とする²。その上で若干はあるが、時代ごとの特徴などについても触れておきたい。ただし、口答発表は時間制約があることから、前半は飛鳥・白鳳期の寺院関連鬼瓦、後半は平安宮京関連鬼瓦に絞って進めることとする。

B 飛鳥・白鳳期の鬼瓦（第 1 図）

当該期の鬼瓦は山背国の 9 遺跡で出土している。以下で郡ごとに鬼瓦の様相を確認していく。

i 宇治郡

①大宅廃寺（京都市山科区鳥井脇町ほか）

概要 大宅廃寺は 7 世紀後半頃に創建された寺院である。大和から近江に抜ける北陸道を見下ろす位置に占地する。昭和 33 年以来の数度の発掘調査で、南西建物（推定金堂跡）・南東建物（推定塔跡）・中央建物（講堂）・北方建物（僧房）・築地などが確認されている（有光 1959・平方 1988・網 2005）。創建瓦は小山廃寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセットで、後に小山廃寺式軒丸瓦と藤原宮式軒平瓦に変わる（網 1999）。発掘調査によって、奈良時代末から平安時代前期にかけて大規模な改修が行われたことが確認されてはいるものの、詳細な様相はほとんど明らかにされていない。また、寺院の廃絶時期は 10～11 世紀頃と

考えられている。

1類（第2図-1） 全体像は不明であるが、盤面一杯に弁幅の広い蓮華文を配す。範による成形で、形状は不明である。側面はヘラケズリ、裏面はナデによって平坦に調整している。推定金堂とされる南西建物基壇東側の搅乱坑から出土している。醍醐廃寺1類や大鳳寺1類と同文である。

2類³（第2図-2・3） 1次調査を担当した坪井清足氏の復元案（第3図）によれば、文様は盤面中央に単弁蓮華文を配し、その周囲に変形忍冬唐草文を巡らす。また、蓮華文の中房部分に方形の釘穴を穿つ。形状は横に長く、上辺のみがアーチ形となり、下辺中央に抉を設ける（坪井 1958）。範による成形で、側面の調整はケズリである。中心伽藍を取り囲む築地の雨落ち溝などから出土している。その後の資料のなかに復元案と異なるものが確認されており、復元の修正が指摘されている（堀 2010）。もちろん、後出資料が異範で、型式が増加する可能性もある。

②醍醐廃寺（京都市山科区醍醐西大路町ほか）

概要 数度に及ぶ試掘・発掘調査が実施されているが、寺域や堂舎に関わる遺構は確認されていない。木村捷三郎氏らによって、小山廃寺式（大宅廃寺A類）、法隆寺式（法林寺同范）及び四重弧文軒平瓦が採取されている（京都市埋蔵文化財研究所 1996・星野 2004）。これらの瓦が創建期のものとすれば、7世紀後半頃には建立されたと考えられる。

1類（第4図） 盤面一杯に鎬（凹線）のある花弁と先端が尖る間弁を配す。範による成形で、形状は不明である。現在の京都市醍醐東市営住宅の南側で採取された可能性が高い。大宅廃寺1類と大鳳寺跡1類と同文である。

③岡本廃寺（宇治市五ヶ庄岡本）

概要 岡本廃寺は7世紀後半頃に創建された寺院跡である。昭和60年の発掘調査で、はじめて寺院跡であることが確認された（宇治市教育委員会 1987-1）。調査で金堂跡、講堂跡、塔跡を検出し、法隆寺式伽藍配置であることが明らかになっている。創建瓦は珠文帶複弁八葉蓮華文軒丸瓦（川原寺式）、法隆寺式軒丸瓦及び法隆寺式軒丸瓦の退化とされている単弁八葉蓮華文、三重弧文軒平瓦、四重弧文軒平瓦である。創建から間もない7世紀末～8世紀初頭にかけて金堂の補修が行われ、8世紀末には焼失し、この頃から徐々に衰退したと考えられている。

1類（第5図-1） 文様は素弁八葉蓮華文である。弁先中央が僅かに突出し、中央に凸型の中房と1+4の蓮子を配す。盤面の上端側面よりに弧状の線が巡る。範による成形で、報告書によれば形状は縦長の長方形で、下辺中央に抉を設ける。裏面は繩を巻き付けた工具を用いて叩き締められている。推定講堂北側の瓦集積土坑（SK 104）と中世以降に瓦を破棄した溝（SD 161）から出土している。

2類（第5図-2） 報文では幾何学文とするが、蓮華文の可能性がある。直径約5cmの円形の中心に「十」を配す。盤面に対し文様が小さいことから、同じ文様が連続する可能

性が高い。なお、1類は補修期、2類は創建期に使用されたと推測されている。

④大鳳寺跡（宇治市菟道西中）

概要 大鳳寺跡は7世紀後半頃に創建された寺院跡である。昭和46年の発掘調査によって瓦積基壇の一部が確認された（林屋ほか1973）。その後の範囲確認調査（昭和57～61年）により、瓦積基壇が金堂であること、伽藍配置が法起寺式であることが明らかにされた（宇治市教育委員会1987-2）。創建瓦は川原寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦である。また、平城宮瓦編年Ⅲ期に属する平城宮6225系・6282系・6663Cと、平安京遷都時に開窯した西賀茂角社瓦窯産軒瓦、「大伴」銘軒瓦なども出土することから、8世紀中頃及び9世紀初頭に部分的な補修がなされたと考えられている。寺院の廃絶時期は12世紀後半～13世紀後半の間とする。

1類（第6図-1） 文様は素弁八葉蓮華文である。鎬（凹線）のある花弁と剣菱形の間弁を配す。側面側から蓮華文の上端にかけて凸線が巡る。范による成形で、形状は上辺がアーチ形となる。裏面の調整はオサエである。

2類（第6図-2） 報文では幾何学文とするが、花弁中央の子葉を強調した単弁蓮華文ともとらえることができる。直径約7.5cmの車輪状の文様を複数個並べる。

ii 葛野郡

⑤広隆寺（京都市右京区太秦蜂岡町）

概要 広隆寺は7世紀前半から中頃に創建され、現在に法灯を伝える寺院である。『日本書紀』推古天皇11年（603）聖徳太子から仏像を受けられた秦河勝が建立したとされる蜂岡寺の候補地の1つである。

これまで数度の発掘調査が実施されているが、創建堂舎に関わる明確な遺構は確認されていない。大正年間に現在の薬師堂の西方から塔心礎が出土しており、その辺りに塔が位置していた可能性はあるが詳細は不明である。また、昭和52年の発掘調査で基壇状の積土を確認し、塔院を形成する回廊との報告（石尾1982）がなされているが、建物方位が著しく傾くなどの問題点も指摘されている（堀2010）。創建瓦はいわゆる四天王寺式の素弁八葉蓮華文軒丸瓦と北野廃寺の影響を受けたとされる有軸素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。

1類（第7図） 文様は素弁八葉蓮華文である。蓮華文は直径約6cmで盤面より僅かに盛り上がる。花弁は輪郭が盛り上がり、中房は周囲に溝を巡らせ中心部のみ突出する。全体では複数の蓮華文が並んでいたと考えられている。板に粘土を盛りあげて、スタンプで有稜素弁蓮華文を施文したと推測されている。また、下辺部にヘラ切りによる抉りを施す。昭和52年の発掘調査で素文軒平瓦及び重弧文軒平瓦と共に出土した。

⑥北野廃寺（京都市北区北野上白梅町）

概要 北野廃寺は7世紀初頭に創建された寺院跡である。これまでの発掘調査によって、瓦積基壇（推定講堂）とそれに取りつく回廊、掘立柱建物群や寺域内の工房跡などが確認

されている（京都市埋蔵文化財研究所 2011・2012 ほか）。創建軒丸瓦が飛鳥寺創建瓦製作工人集団（いわゆる「花組」）の系譜を引く素弁十葉蓮華文軒丸瓦や隼上り瓦窯跡（宇治市）出土の有軸素弁八葉蓮華文軒丸瓦と同范品である。山背国北部での最古の寺院に位置づけられている。

1類（第8図） 文様は盤面の側面よりに重弧文状の圈線が巡る。范による成形で、形状は不明であるが、下辺中央に抉りがあり鍵穴状を呈す。側面、裏面ともに調整はケズリである。南都七大寺式鬼瓦の圈線部分のみを表現している可能性もあるが、本報告では重弧文の可能性を考慮し、当該期に含めた。

iii 乙訓郡

⑦樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯跡（京都市西京区樅原内垣内町）

概要 樅原廃寺は7世紀中頃から後半にかけて創建された寺院である。これまでの発掘調査によって、伽藍配置などが明らかにされている。伽藍配置は中央に東西約14mの推定金堂、その南側に八角形の塔が配され、塔の南側に推定金堂より大きい東西20m、南北11mの中門がある。中門の東西に回廊が取り付くが、東面と西面及び北面は築地となる。なお、推定金堂、東・西・北面築地は瓦葺ではなかったとされている。その他に、奈良時代末～平安時代初頭にかけての遺構・遺物が多いことから、長岡京期から平安時代にかけて堂舎の修理が行われたと推測されている（佐藤 1967・杉山ほか 1967・久世 1998 など）。また、伽藍西側の斜面地に瓦窯があり、灰層から鬼瓦（2類）が出土している（長門 1991）。

創建瓦は素文縁重弁八葉蓮華文軒丸瓦と素文軒平瓦のセットが考えられているが、他に複弁十葉蓮華文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦などが出土している。

1類（第9図-1・2） 文様は長方形の枠を分割した中に2つの蓮華を意識したと思われる車輪文様を配す。裏面は斜格子を刻んだ叩き板で調整するものとナデによる調整の2種類がある。側面の調整はケズリである。范による成形で、形状は縦長で上辺がアーチ形となり、下辺中央に抉り、盤面中央やや上寄りに2箇所の穿孔を設ける。

2類（第9図-3） 宝菩提院廃寺出土1類と同范である。文様は宝菩提院廃寺創建瓦（H DM-I型式）を基調とした単弁七葉蓮華文である。当該資料の下端部に抉りが認められ、後述の宝菩提院廃寺出土資料を勘案するならば、鬼瓦下辺中央に抉りがあったことが判明する。樅原廃寺瓦窯跡の灰原から出土している。

⑧宝菩提院廃寺・宝菩提院廃寺瓦窯跡（向日市寺戸町）

概要 宝菩提院廃寺は願徳寺跡と宝菩提院跡の総称として便宜的に使用されている遺跡名称である。7世紀後半頃の創建で向日丘陵の東斜面に位置する。長岡京期には「京下七寺」に列格し、『類聚国史』大同5年条にみえる「長岡寺」とみられる。遅くとも平安時代には願徳寺とも呼ばれていたようである。これまでに創建期の堂舎に関する遺構は確認されていないが、寺院の西側で瓦窯の灰原を検出し、遺物の検討により7世紀後半頃には造寺を

開始していたと考えられている（梅本 1997）。その他には9世紀の井戸から「大膳」・「寺」・「供養」などの墨書き土器が出土したことから、寺域の北側中央西よりに「大衆院」があったと想定されている（山中 1979）。

1類（第10図-1・2） 横原廃寺・横原廃寺瓦窯2類と同范である。文様は盤面に2個2列の蓮華文と側面よりに撥形の文様を配す。蓮華文は宝菩提院廃寺創建瓦（HDM-I型式）を基調とした单弁七葉蓮華文である。范による成形で、形状は縦に長い長方形、上辺がアーチ形となる。復元案によれば推定縦幅が44cm、横幅が31.6cmとなる（第10図-3）。

⑨山崎廃寺（乙訓郡大山崎町字大山崎）

概要 山崎廃寺は7世紀代に創建された寺院である。天王山から派生する丘陵の裾から扇状地に立地し、山（背）城、摂津、河内、丹波の方面間を往還する際に、通過せざるを得ない交通の要衝に位置する。これまで堂舎に関わる遺構は確認されていないが、塑像、博仮、壁画などの寺院関連遺物が出土している。また、8世紀代の平城宮式軒瓦や10世紀代の讃岐産軒瓦が出土している（大山崎町教育委員会 2005）。

1類（第11図） 文様は单弁蓮華文である。小型の中房をもつ蓮華文を盤面一杯に配す。花弁の中心に稜線がめぐり、間弁を配す。范による成形で、形状は不明である。

iv 小結

文様と形状 当該期の文様は蓮華文、蓮華文と唐草文、車輪文に大別することができる。ただし、車輪文も蓮華を表現している可能性が高く、蓮華文が主体であったといえる。また、蓮華文は単体と複数個体を連続させたものに分類できる。形状は岡本廃寺1類以外の全てが上辺のみアーチ型となり、縦長の長方形（岡本廃寺1類、横原廃寺1・2類、宝菩提院廃寺1類）、横長の長方形（大宅廃寺2類）、正方形（大鳳寺1類）にわけられる。

成形方法 基本的には范による成形であるが、広隆寺出土鬼瓦1類のみスタンプを用いて施文しており、他に類を見ない。

生産・使用年代

①大宅廃寺1類と2類はともに单弁蓮華文を基調とするが、2類には藤原宮式軒平瓦と共に通する変形忍冬唐草文が配されている。したがって、2類は藤原宮式軒平瓦と同時期に生産されたと考えられる。大宅廃寺出土の変形忍冬唐草文軒平瓦（藤原宮式軒平瓦）は、小山廃寺式軒丸瓦とセット関係にある重弧文軒平瓦より後出であることから、創建期から少し遅れた7世紀末頃には生産・供給を開始したと推測できる。

一方、1類は出土地点が攪乱坑ではあるが推定金堂基壇に近接した場所であり、金堂所用鬼瓦の可能性が高い。昭和33年と昭和60年の発掘調査で出土した軒瓦の型式比率を検討した網氏は、推定金堂創建瓦を小山廃寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦とする（網 1999）。すなわち、金堂の造営が中心堂舎の中で最も早く進められていたことになり、1類が2類に

先行し生産されたと推測できる。このことは、1類の文様が単弁蓮華文のみであることとも符合する。もちろん、大宅廃寺の造寺開始から藤原宮式軒瓦が生産されるまでに大幅な時間的隔たりはなく、両型式の生産年代にも時間的差はほとんどない。

⑦樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯1類と⑧宝菩提院廃寺1類は盤面に複数の文様を配し、縦に長い長方形を呈すなどの共通点が多く認められる。この内、宝菩提院廃寺1類は、当寺院の創建瓦とされている単弁七葉蓮華文（HDM-I型式）を基調としていることから、創建期にあたる7世紀後半頃に生産されたと推測されている（新倉1999）。一方、樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯跡1類の文様が蓮華を抽象化したような車輪文であることから、宝菩提院廃寺1類の型式化（退化）とも考えられるが、形状が縦に長い長方形を呈していることに留意しておきたい。鬼瓦は棟端をおさめるための瓦であることから、形状が長方形であることは棟の高い建物に葺くために制作されたことになる。既に確認した通り、樅原廃寺は八角塔・中門・南面回廊のみが総瓦葺であり、この内、棟が高い建物は塔と中門に限られる。推定金堂跡の発掘調査を担当した久世康博氏は、樅原廃寺は広い寺域に対して金堂の規模が小さく、講堂も建てられなかつたことから、本来塔の三方に金堂、その北側に講堂を造る壮大な計画であったが、なんらかの原因により計画変更を余儀なくされたとする（久世2004）。この意見を首肯するのであれば、樅原廃寺では瓦葺建物の造営が先行して行われていた可能性が高く、金堂規模が中門より小規模であることを勘案すれば、金堂の造営着手前もしくは直後に計画変更が生じたと考えることができる。したがって、⑦樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯1類は、瓦葺建物である塔と中門の創建期にあたる7世紀中頃～後半に生産されたと推測できる。このようなことから、⑦樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯1類と⑧宝菩提院廃寺1類はほぼ同時期に生産・供給されていたと考えられる。

なお、現資料のみでは、広隆寺1類や岡本廃寺2類、大鳳寺跡2類などの盤面に小型の蓮華文を複数並べる鬼瓦の生産・使用年代は明らかにできない。ただし、報文では岡本廃寺2類が7世紀後半頃に生産・供給されたと推測されている。また、北野廃寺1類は奈良時代の可能性もあり、詳細な生産時期は今後の課題である。以上の通り、山背国には7世紀初頭に創建された北野廃寺や広隆寺、高麗寺などがあるものの、鬼瓦の出現は7世紀中頃から後半（白鳳期）を待たなければならない。

同文関係 醍醐廃寺1類と大鳳廃寺1類は同文関係にあり、蓮華文を盤面一杯に配す点は、大宅廃寺1類、山崎廃寺1類、岡本廃寺1類とも共通する。この内、山崎廃寺を除く4ヶ寺が宇治郡に位置し、なかでも大宅廃寺と醍醐廃寺は創建期の軒丸瓦（小山廃寺式）が同範関係にあり、大宅廃寺で使用されていた瓦当範が醍醐廃寺に移されたと考えられている。宇治郡内では7世紀後半に建立された寺院の瓦生産体制に強い関係性が認められる。また、乙訓郡でも樅原廃寺・樅原廃寺瓦窯1類と宝菩提院廃寺1類が同範関係にあり、宝菩提院廃寺瓦窯の工人が樅原廃寺瓦窯の瓦工人の系譜に連なるものと考えられている（新倉2001）。このように、白鳳期の寺院は、所在する郡内において強い繋がりが認められ、さらに特定

の寺院には郡をまたいだ繋がりもうかがえる。一方、軒瓦が同文にも関わらず鬼瓦に共通点がない場合、これとは反対に鬼瓦が同文であるにも関わらず、軒瓦に共通点が認められない場合もある。このような相違が何に起因するのかは今後の課題である。

C 奈良時代（第12図）

当該期の鬼瓦は山背国の13遺跡、丹後国の2遺跡で確認されている。このうち、山背国では葛野郡が2箇所、乙訓郡が1箇所、宇治群が1箇所、久世群が3箇所、綏喜郡が5箇所、相楽郡が1箇所であり、平城京に近い山背国南部に分布が偏っていることが分かる。

i 丹後国

①平城宮式系鬼瓦 京丹後市網野町俵野に所在する俵野廃寺から、平城宮I式の影響を受けた鬼瓦が採取されている（第13図）。俵野廃寺は俵野川の沖積平野に立地する寺院跡で、白鳳時代に創建されたと推測されている。これまで発掘調査は実施されていないが、俵野川の付け替え工事の際に礎石などが確認されている（網野町誌編纂委員会1992）。

鬼面は目・鼻・口・眉・腕と先端が三叉に分かれ、下方には「て」の字形の足が置かれる。鬼神全体の表現は稚拙な印象を受けるが、鬼神が蹲踞する姿勢を表現する点が平城宮I式鬼瓦（708～721）と共通する。範による成形で、形状は側辺からの上辺にかけてのアーチ形である。下辺中央に横長半円形の抉りがあり、中心に孔が設けられる。報文によれば、高さと幅が26.2cmで厚さが約3cmである。

②蓮華文 京丹後市久美浜町（熊野郡）に所在する堤谷窯跡から蓮華文鬼瓦が出土している（第14図）。堤谷窯跡は古墳時代から奈良時代初頭まで操業していたとされる生産遺跡で、須恵器とともに单弁九葉蓮華文軒丸瓦と素文軒平瓦が生産されている。

鬼瓦の文様は盤面一杯に蓮華を配す。範による成形で、形状は側辺から上辺にかけてのアーチ形である。下辺中央に横長半円形の抉りがあり、中心に孔が設けられる。孔に粘土棒を挿し込んで棟に固定していたと想定されている。生産年代は8世紀初頭と考えられている（上原2020）。

ii 山背国

①平城宮式鬼瓦（第15図） 平城宮式鬼瓦（毛利光1980）が出土した遺跡は、井出寺跡、正道遺跡、普賢寺、平川廃寺である。このうち、平城宮II式Aが井出寺跡、II式B1が正道遺跡・普賢寺、III式が平川廃寺から出土している。井手寺出土鬼瓦は復元高（全長）が約35cmで、下辺中央の抉りが上顎の歯の際まで及んでおり、形状が横長半円となる。正道遺跡出土鬼瓦は全長が約26cm、幅が約29cmである。

②南都七大寺式鬼瓦（第16図） 南都七大式鬼瓦が出土した遺跡は、正道遺跡、平川廃寺、

久世廃寺、山背国分寺（恭仁宮）である。このうち、南都七大寺Ⅰ式が山背国分寺の塔院地区、ⅣA式が大極殿地区、内裏地区、塔院地区から出土している。前者は裏面を削り込み棟に固定するための環状把手が付けてられている。これらの鬼瓦は、軒瓦などの共伴関係から山背国分寺施入後に製作・供給されたと考えられている（上原 1984）。また、平川廃寺、正道遺跡、久世廃寺から南都七大寺Ⅳ式が出土している。正道遺跡出土の鬼瓦は、報告の図版写真を見る限り、脚部下端に無文部分が残るが、久世廃寺ではこの部分を欠く（城陽市教育員会 1973・1981）。また、久世廃寺の鬼瓦は朱塗りされている。

③南都七大寺式系鬼瓦 南都七大寺式と同様の特徴を持つ鬼瓦が北野廃寺（第17図-1・2）、南春日廃寺（第17図-3）、大鳳寺跡（第17図-4）などから出土している。

北野廃寺2類は特徴的な図像で、眼がコンパスなどを用いて施文したと思われる正円で、鼻や口の表現を欠く。外区には鋸歯文と珠文、側面に三重の線が巡る。盤面を範で成形した後にヘラや竹管のような工具を用いて鬼面を施文する。また、脚部に人物像を描くものがある（図17-2）。裏面、側面ともに調整はケズリである。形状はアーチ形である。鬼面風の図像で外区に鋸歯文と珠文が巡ることから、南都七大寺式系と考えた。

大鳳廃寺出土鬼瓦（大鳳廃寺3類）の鬼面は、目尻がつり上がり、額にしわを表現する。鬼面と圈線との間に滴状のものを配し、額上部に凸線が巡る。外区には柳葉状の珠文が巡る。範による成形で、側面の調整はケズリ後ナデ、裏面はナデである。

奈良時代の創建とされる南春日廃寺（京都市西京区大原野南春日町）から、突き出した目の周りに太い眉と下まぶたを配した鬼瓦（南春日廃寺3類）が出土している。形状は側辺から上辺にかけてのアーチ形で、盤面を範で成形した後に粘土を貼り足して鬼面を製作する。

④蓮華文 南春日廃寺では蓮華文鬼瓦も出土している（第17図5・6）。蓮華文は重弁蓮華文（1類）と素弁蓮華文（2類）の2種類がある。1類は盤面一杯に重弁八葉蓮華文を配す。中房は凹で圈線と8個の蓮子が巡る。花弁は重弁で撥型の間弁を配し、花弁と花弁をつなぐように圈線が回る。外区には外縁が巡る。範による成形で、形状は側辺から上辺にかけてのアーチ形で、中央に釘穴を穿つ。裏面の調整はタタキ、側面・脚部端面はケズリである。なお、外縁を切り縮めたものがある。2類は盤面一杯に素弁五（六）葉蓮華文を配す。外縁に圈線が巡る。範による成形で、形状は側辺から上辺にかけてのアーチ形で、中央に釘穴を穿つ。裏面の調整はオサエ、側面はナデである。

iii 小結

平城宮鬼瓦Ⅱ式が確認されている井出寺跡や正道遺跡、普賢寺では奈良時代後期の軒瓦も数多く出土している。これらの遺跡は奈良時代後期（平城宮瓦編年Ⅱ～Ⅲ期）に整備されており、平城宮式鬼瓦の編年案とも齟齬がない。したがって、鬼瓦は平城宮式軒瓦と同じ時期に製作・供給されたと考えられる。また、平城宮鬼瓦Ⅲ式が出土する平川廃寺では、

平城宮 6291 系と久世廃寺、正道遺跡と同範の单弁十一葉蓮華文軒丸瓦、平城宮 6664 系と久世廃寺・正道遺跡と同範の唐草文軒平瓦がまとまって出土している。このうち、平城宮 6291 系及び 6664 系は平城宮瓦編年第Ⅱ期に相当し、平川廃寺においても編年案通りⅡ～Ⅲ期に生産・供給されたと考えられる。

D 長岡京期（第 12 図）

i 山背国

当該期は難波宮・平城宮から再利用を目的に運び込まれた鬼瓦と南都七大寺式IV・V式の系統を引いた新たな鬼瓦（長岡宮式）が使用される。

①再利用瓦（第 18 図） 平城宮IV式・V式 A が長岡宮北辺官衙跡、朝堂院北西官衙跡、東宮跡から、南都七大寺IV式が長岡宮朝堂院南方官衙跡、長岡京二条大路南側溝跡、乙訓寺跡から出土している。また、難波宮式鬼瓦が長岡宮朝堂院跡で確認されている。これらはいずれも旧都からの再利用と考えられる。

②長岡宮式（第 21 図） 長岡京期に新たに製作された鬼瓦である。鬼面の表現がIV・V式と近似するが、眉が独立し鼻柱上の皺が増え、鼻孔が猪目状となり、外区には珠文と外縁及び脚部下端に横方向の凸線が巡る。範による成形で、形状は側辺から上辺にかけてアーチ形となる。高さが約 31.2cm、横幅が約 33cm で、下辺中央の抉りは横長半円形である。裏面に固定装置はないが、長岡宮出土例には鼻柱に釘穴が認められる。側面、裏面とも調整はケズリである。また、上部珠文帯に範傷が認められる。長岡宮東宮跡、朝堂院南方官衙跡・南面築地廻廊跡、左京二条二坊五町跡、樅原廃寺、北野廃寺などから出土している。

ii 小結

長岡宮京内から出土した鬼瓦は、再利用瓦の割合が高く、宮内外の施設の造営に際して、旧都の瓦を積極的に使用していることが分かる。再利用瓦の積極的な使用は軒瓦と同様である（小林 1966）。

他方、長岡宮式鬼瓦は長岡宮式軒瓦とともに長岡宮京内及び、鞍岡廃寺、樅原廃寺、北野廃寺などの長岡京近郊諸寺院跡から出土している。浪貝毅氏は樅原廃寺から出土した長岡京期の鬼瓦（長岡宮式鬼瓦）が『続日本紀』延暦 10 年（791）「浮圖修理詔」に関係することを指摘した（浪貝 1972）。その後、山中章氏は長岡京近郊諸寺や北野廃寺から出土する長岡宮式軒瓦を集成したうえで、長岡宮式軒瓦を「都城系」と「寺院系」に区分し、「寺院系」瓦が浪貝氏の指摘した山背国内諸寺の塔の修理（「浮圖修理詔」）を契機に生産された一群と考えた（山中 1989）。これに対して中島信親・古閑正浩氏らは長岡宮式軒瓦の生産は「造宮使系」、「勅旨所系」、「乙訓寺系・内廷官司系・諸寺系」の各造瓦所で行われ、生産時期や供給場所が異なっていたとする（中島 2002、2004・古閑 2010）⁴。このような軒

瓦の分類にしたがえば、長岡宮・京は「造宮使系」、樺原廃寺は「造宮使系」・「諸寺系」、北野廃寺は「造宮使系」・「勅旨所系」・「造寺使系」の造瓦所から瓦の供給を受けたことになり、鬼瓦がどの段階のどの造瓦所で生産されていたのかは判然としない。ただし、長岡宮・京内を主な供給先としていた「造宮使系」の造瓦所は、上述した造瓦所の中で最も開窯時期が早いとされており、長岡宮式鬼瓦も「造宮使系」の造瓦所で創出され生産が開始されたと考えられる。また、北野廃寺から出土した長岡宮式鬼瓦の珠文帯には、長岡京跡出土の鬼瓦には確認できない范傷が認められる。北野廃寺境内瓦窯には「勅旨所系」造瓦所で生産されていた 7193Ac・7722F の瓦范が移動しており、鬼瓦も上記の軒瓦の范とともに北野廃寺瓦窯に移動した可能性がある。ただし樺原廃寺等から長岡宮式鬼瓦が出土していることから、「諸寺系」の造瓦所から、各々寺院に供給したとも推測することができる。したがって、長岡宮式鬼瓦は「造宮使系」で成立し、その後各造瓦所に移動し、生産されたと想定できる。つまり、長岡宮式鬼瓦の范は、1つの造瓦所で保持され続けたのではなく、長岡京及び京近郊の寺院の造営状況に合わせて、造瓦所間を往来していたことになる。このことは当該期で新たに創出された鬼瓦が1形式であることも傍証となろう。

E 平安時代（第 19・20 図）

当該期は、旧都からの再利用鬼瓦の他に長岡宮式鬼瓦や南都七大寺式などの系統を引く新たな鬼瓦が使用される。以下では平安時代に製作され、主に平安宮・京内で使用されたと考えられる鬼瓦を平安京●●式と呼称する。ただし、鬼面を欠く資料が複数あり、今後型式が増加する可能性が高い。なお、個々に名称をつけたものもある。

i 平安京式鬼瓦

平安京式鬼瓦は南都七大寺式を踏襲し、鬼面は大きく開いた口の下顎下端・下歯の表現を欠き、形状は側辺から上辺にかけてアーチ形となり、外区に沿って珠文を巡らせる。

未発表資料を含めて、平安時代に生産された鬼瓦を I～XIV 式に分類した。なお、これ以外にも鬼面を欠く資料は複数あり、今後型式が増加する可能性が高い。

①平安京 I 式（第 22 図） 全体像が判明する資料はないが、長岡京式鬼瓦の影響を強く受けている。眉は独立し上部に皺があり、目尻のしわと眉が一体で表現されている。下顎の牙がかろうじて残る。外区に小粒の珠文と外縁が巡る。また、外縁が切り縮められているものがある。范による成形で、側面の調整はケズリ、裏面はナデとケズリである。脚部下端面は未調整である。平安京右京三条一坊三・七町跡、西寺跡、西賀茂角社東群瓦窯跡から出土している。

②平安京 II 式（第 23 図） 平安京 I 式と同文であるが I 式に比べて珠文帯の幅が広く珠文も大きい。范による成形後に珠文のみに、カップ状の工具を用いて施文する。側面・裏面

の調整はケズリである。西賀茂瓦窯跡及び平安宮朝堂院跡から出土している。なお、I式範の彫り直しも考えたが、資料が限られるうえ範傷などの決定的証拠がないことから、別型式と判断した。

③平安京Ⅲ式（第24図） 眼は小さく、眼尻が上る。眉は先端が巻き込み、上方に立ち上がる。上牙は外向する。下牙は欠く可能性が高い。鬼面と外区の間に複線鋸歯文を配し、外区は二重圏線で外側に面違幅状文、圏線の間に小粒の珠文が密に巡る。鬼面の様相が南都七大寺及び長岡京式と大きく異なり、統一新羅の影響が濃いとする（山本1998）。範による成形である。側面、脚部下端面の調整はケズリ、裏面はナデである。平安宮内裏跡及び大極殿院龍尾段跡付近から出土している。

④平安京Ⅳ式（第25図） 破片のため鬼面の様相はほとんど明らかではないが、上顎の牙が直線的で、歯が牙より一段高く表現されている。また、外区に面違幅状文と珠文が巡り、側面には段に対応する溝を刻む。裏面に固定装置と考えられる突帯が取り付く。範による成形である。平安宮式部省跡から出土している。

⑤平安京Ⅴ式（第26図） 眼が小さく眼尻が吊り上り、眉は先端が巻き込み、上に立ち上がる。鼻孔の小さい鼻で鼻柱が高く、耳が外区部まで突き出る。下顎の牙がかろうじて残る。外区には珠文と唐草、外縁が巡る。範による成形である。裏面に固定装置はないが中央部が少し凹む。下辺中央部の抉りは段状にケズリとられている。側面の調整はケズリ、裏面は同心円状にナデるものとケズるものがある。脚部下端面は未調整で離れ砂が付着する。厚さが約3.5～5cmと幅がある。なお、東寺觀智院に伝わる羅城門鬼瓦は施釉（三彩）されている。平安宮朝堂院跡、豊楽殿跡、典薬寮・御井跡、左京三条三坊十二町跡、右京三条一坊二町跡、西寺跡、東寺、西賀茂角社瓦窯跡、伝羅城門から出土している。

⑥平安京Ⅵ式（第27図） 上牙の先端と下牙の先端がほぼ同じ位置にある。下牙は外向する。外区には珠文と外縁が巡る。下端には側面から連続しない2重の圏線が巡る。範による成形である。裏面の調整はケズリである。右京二条二坊八町跡から出土している。

⑦平安京Ⅶ式（第28図） 目が傾卵形で、眉は高く盛り上げる。眉間にしわを寄せ、その上に外向する巻き毛を配す。鼻柱は横に長く鼻孔は小さい。鼻柱と眉間の間に直線的なしわがある。口端をつり上げしわを寄せ、上牙は外側を向く。また、上歯が下歯より突出する。外区には小粒の珠文と外縁が巡る。範による成形である。側面の調整はケズリ、裏面はケズリ後ナデである。東寺から2点（2個体）出土しており、うち1個体には朱が塗られている。

⑧平安京Ⅷ式（第29図） 鬼面部分を欠くが、髭状の線と外区に珠文が巡ることから平安京式と判断した。外区には珠文と外縁が巡る。範による成形で、珠文と髭は工具を用いて施文する。側面・裏面はケズリで平坦に仕上げる。厚さは8.0～8.5cmと平安京式の中で最も厚い。平安宮豊楽殿跡、太政官跡、左京四条三坊七町跡から出土している。なお、すべての個体に緑釉もしくは二彩が確認できる。

⑨平安京IX式（第30図） 鬼面の上歯に下牙が配される。上牙、下牙ともに中心が凹み、口端からは上向きの鬚が配される。外区には珠文と外縁が巡る。範による成形である。側面、裏面の調整はケズリである。左京四条一坊十二・十三町跡から出土している。鬼面の表現が平安京I～VIII式とは異なり、管見の限り同文品はない。地方で生産され、平安京内に持ち込まれた可能性がある。

⑩平安京X式（第31図） 眉が高くキザミを入れる。外縁には珠文が巡る。範による成形後に粘土を付加し眉などを製作する。小野瓦屋から出土している。

⑪平安京XI式（第32図） 大きい目と太い眉を配す。範による成形である。小野瓦屋から出土している。

⑫平安京XII式（第33図） 上顎と下歯を配す。外区には珠文が巡る。範による成形である。池田瓦窯跡から出土している。

⑬平安京XIII式（第34図） 目は指で穴を穿ち、鼻はわずかに粘土を貼り足し、口部分に線を刻む。池田瓦窯跡から出土している。

⑭平安京XIV式（第40・41図） 盤面に粘土を貼り足して盛り上げた後に鬼面と珠文を彫刻する。管見の限り16個体以上が出土しており、鬼面の様相がそれぞれ異なる。下歯の表現を欠くが、上歯の横に下歯が配される。裏面に固定装置はないが、ナデやケズリなどで深く削り込む。また、珠文の中央に孔が穿たれているもの、側面に「大国」と刻むものがある（第40図）。全長が約43～48.5cm、幅が約36.5～40cmと非常に大型である。平安宮龍尾壇付近と中和院付近からまとまって出土している。

ii その他

⑮三彩鬼瓦（第35図） 全体の様相は不明であり、鬼面であるのか定かではなく、平安京式鬼瓦に含めていない。一部細い串状工具で施文する。また、盤面に粘土を足して盛り上げて文様部分を表現する。平安宮大極殿院跡、豊楽殿跡、仁和寺から出土している。

⑯無文鬼瓦（第36図） 正面側にナデによる平坦面をつくりだす。範による成形で、裏面上半部の調整はナデであるが、下半は未調整となる。脚部下端は傾斜する。右京三条三坊十四町跡から出土している。また、形状の異なるものが美濃山廃寺瓦窯跡から出土している。

⑰平城宮式系鬼瓦（第39図） 木津川市に所在する高井手瓦窯跡から、平安時代に生産されたと推測されている鬼瓦が出土している。鬼瓦は目や鼻が突出せず、鼻腔を下向きに小さく表現する。外区には珠文が巡る。範による成形で、形状は側辺から上辺にかけてアーチ形となる。

⑱北白川廃寺1類（第37図） 屈曲した太い眉と鼻柱の上に眉間のしわを表現する。頂部にのみに珠文が巡る。範による成形で、形状は頂部中央が突出するアーチ形である。裏面の調整はケズリ後ナデ、側面はケズリである。塔跡から出土している。

⑯南都七大寺ⅠB2式（第38図） 口端がつり上がり、上牙、下牙ともに全体が表現されている。上歯と牙に沈線を入れて立体的に表現する。外区には珠文と外縁が巡り、珠文と鬼面の口の間に鋸歯状の凸線を配す。範による成形で、側面・裏面ともに調整はケズリである。脚部下端面は未調整である。また、裏面の側面縁は面取りされる。西寺食堂北側及び講堂跡から出土している。

南都七大寺ⅠB2式と同範の可能性が高い。同型式は東大寺創建に関わる740～750年代に生産されたとされる。したがって、西寺から出土するものは再利用されたものと考えられるが、西寺の中でも創建時期がやや遅れる講堂や食堂などから出土していることから、平安時代に生産された可能性もあり生産時期の特定は今後の課題である。

iii 編年案

平安時代の瓦編年は、平安時代前期・中期・後期に区分して検討されている⁵。そこで、本報告でもこれに準じて各型式のおおよその年代を検討する。

平安時代前期 当該期に属するのが平安京Ⅰ～Ⅷ式・三彩鬼瓦である。

平安京Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ式の鬼面は長岡宮式鬼瓦の系譜にある。このうちⅠ・Ⅱ式が西賀茂瓦窯跡から出土しており、同瓦窯で製作されたと考えられる。西賀茂瓦窯は、平安京遷都に伴つて平安京北方の丘陵地に築かれた造瓦所で、長岡京の「造宮使系」の瓦工人組織が再編成されて成立したと推測されている（近藤1978、網2002、古閑2011）。したがって、長岡京式の系譜下にあるⅠ・Ⅱ式は長岡京の造宮使系の瓦工人によって、考案・製作されたと考えられ、平安時代前期の中でも最も早い8世紀末頃には生産が開始したと推測する。

平安京Ⅲ・Ⅴ式は鬼面の眼が小さく眉が上方に立ち上り、外区に唐草文や面違輻状文を配すなど、前都で主流とされていた平城宮式や長岡京式（南都七大寺式）とは様相を異にする（岸本1990）。このうち、Ⅴ式は西賀茂瓦窯跡から出土していることから、Ⅰ・Ⅱ式と同様に同瓦窯で生産されていたと推測できる。したがって、Ⅴ式の生産も平安京遷都事業開始直後に開始されたと推測できる。ただし、Ⅴ式は豊楽殿跡や東寺・西寺跡など造営がやや遅れていた施設からも出土していることからⅠ・Ⅱ式よりも生産期間が長い、またはやや遅れて生産が開始されたと考えられる。

また、Ⅲ式の鬼面はⅤ式との共通点が多く認められることから、Ⅴ式の生産年代と大きな隔たりはないと考えられる。ところで豊楽殿跡からはⅤ式とともに、三彩鬼瓦や平安京Ⅷ式鬼瓦が出土している。発掘調査によって、創建豊楽殿の屋根には鳳凰をあしらった緑釉鷲尾が大棟の端を飾り、軒先には平安宮内最大規格の緑釉軒瓦が葺かれていたことが明らかにされている。（鈴木1995）。この様な中にあって、施釉されたⅧ式や三彩鬼瓦が降り棟などの端に飾られたことは容易に想像することができる。したがって、両型式の鬼瓦は豊楽殿が完成したとされる大同年間（806～810年）には生産・供給されていたことになる。なお、三彩鬼瓦の一部は範ではなく手によって製作されている。これまでには見られ

ない特殊な鬼瓦製作工人が官窯に所属していた可能性がある。

一方、豊楽殿跡から出土したV式には施釉された痕跡はなく、仮に豊楽殿に葺かれていたとすれば、棟端は無釉の鬼瓦によって飾られていたことになる。もちろん、無釉の鬼瓦が飾られていた可能性を完全に否定することができないものの、三彩鬼瓦が出土していることを勘案すれば豊楽殿出土のV式は豊楽殿ではなく豊楽殿院のいずれかの建物の屋根に葺かれていた可能性が高い。先述した通りV式がやや遅れて生産を開始したこととも符合する。また、豊楽殿の創建緑釉瓦は栗栖野瓦窯跡で生産されていたと考えられていることから、VII式や三彩鬼瓦も同窯で生産されていたと推測できる。軒瓦と同様に平安時代前期における緑釉瓦の生産が幡枝地域に集約されたと想定する。

VI式及びVII式は鬼面が安京式 I・II・V式に近いことから平安時代前期に生産・供給された可能性が高い。なお、VI式は京内でのみ出土が確認されていることから、宮内の造営がある程度完了し、京内の整備の本格的着手時期にあたる平安時代前期中葉と考えられる。

平安時代中期 X・XI式が出土した小野瓦屋は『延喜式』に記載のある、平安時代中期の官窯である。小野瓦屋は9世紀中頃終わりに開窯し、11世紀中頃には終焉を迎える（吉崎2005）。鬼瓦は年代が明らかな遺構から出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、平安時代中期に官窯である小野瓦屋で生産されたことは確かである。また、XII・XIII式が出土した池田瓦窯跡も小野瓦屋とほぼ同じ操業期間（9世紀中～11世紀中頃）であり、XII・XIII式も平安時代中期の生産と考えられる。なお、平安時代中期においても、範作りと一部手による製作技法が継続していることが分かる。

これまで平安宮XIV式は、平安時代前期（9世紀）の製品として紹介されてきた（平安博物館1977、山本1998）。しかし、鬼面及び珠文が範による成形ではなく、彫刻されていること、鬼面が盛り上がり裏面を大きく凹ませるなどの技法的特徴が、明らかに平安時代前期に位置付けた平安京I～VII式とは異なる。

平安時代後期 一方、このような特徴をもつ鬼瓦が、兵庫県神戸市に所在する神出窯堂ノ前支群から出土している。鬼面の様相はやや異なるが、鬼面部分を盛り上げ、上顎に下牙を置き、鬼面及び珠文を彫刻するなどXIV式と同じ特徴が随所に認められる。もちろん、同じ鬼面ではないことから、XIV式が神出窯堂ノ前支群で生産されたとは断定できないが、同系統の工人によって製作された可能性は極めて高い。したがって、本報告では平安宮XIV式が平安時代後期に播磨国で生産されたと推測する（纈纈2018）。平安時代中期から後期になると、宮内をはじめとした大規模施設の造営や修造に、地方国司の財力を期待した方法が採用される。これに合わせて、平安京内外には、地方国産の瓦が運び込まれ消費される。平安京XIV式は播磨国で生産され、京内に供給されたと推測する。

iv 出土地点

平安宮では長岡宮とは異なり再利用鬼瓦の出土量が少なく、管見の限り内裏跡と太政官跡から出土した2点のみである。両施設は再利用軒瓦の占める割合も高く、積極的に再利用瓦を使用していることが分かる。

平安宮I・II式は大極殿院跡や朝堂院跡、平安京右京三条一坊三・七町跡、西寺跡などから出土している。大極殿は延暦14年（795）正月においても完成しておらず廢朝となり、翌15年正月にようやく桓武天皇は大極殿に御して朝賀を受けている。大極殿と併行して造営が進められていた朝堂院は、延暦16年正月の射礼の記載があることから、延暦15年中には完成したと考えられている。このように、両施設は内裏に次いで完成が急がれていた施設であり、平安京II式の生産が平安京式鬼瓦の中で最も早い時期に生産されていたことを示している。一方、平安宮V式が朝堂院跡、豊楽院跡など平安宮内の広範囲で確認されている。なかでも豊楽院は大極殿、朝堂院の完成から少し遅れて完成していることから、ここでも編年案で示した通り、V式がII式より僅かに遅れて生産され始めたことが判明する。また、I・V式が平安京右京三条一坊七町跡・東寺跡、西寺跡など京内各所から出土していることも注目される。右京三条一坊三町は右京職、七町には穀倉院があったとされ、東・西寺は京内に置かれた官営寺院である。右京職が造営された年代は不明ながら、穀倉院は大同3年（808）には造営されている。東・西寺も詳細な造寺過程は不明であるが、延暦14～16年（795～797）には造寺が開始しており、平安宮内の中枢施設の造営と併行して造営事業が進められていたことが分かる。発掘調査でも鬼瓦とともに、再利用瓦や西賀茂瓦窯産の軒瓦が出土しており、I・II・V式が平安京遷都時の中心的な鬼瓦であった可能性が高い。

ところで、平安時代後期に位置付けた平安京XIV式は、朝堂院龍尾壇跡近辺、太政官跡、中和院跡近辺から出土している。とくに、龍尾壇跡近辺からはまとまって出土しており、大極殿もしくは朝堂院に葺かれていた可能性が高い。朝堂院は保元2年（1157）に藤原通憲（信西）が中心となり平安宮内の大規模再建が行われ、大極殿・小安殿・八省院・諸門廻廊・青龍白虎楼・朱雀門・会昌門の東西瓦垣・応天門の東西瓦垣が修築された。また、太政官は文永三年（1266）八月十八日に、外記が転倒したために、機能が移されるなど、13世紀まで存続していることが分かる。このように、XIV式が出土している施設が、平安時代後期まで再建・維持され続けており、出土地点から見ても平安時代後期の生産品である可能性が高いことが分かる。

（京都市文化市民局）

謝 辞

本報告を作成するにあたり、下記のみなさまにご協力、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。
上原真人、上村和直、大立目一、大脇 潔、堀 大輔、村野正景。

註

- 1 発表後に上原真人先生より岸本直文 1990 『第 42 とれんち』「〈論考〉平安宮式鬼瓦」京都大学考古学研究会を紹介していただいた。岸本氏は黒川古文化研究所所蔵の鬼瓦（発表資料平安京 V 式）の資料紹介を通して、V 式の鬼面の様相が前代の鬼面の様相とは異なることを指摘し、V 式が平安宮遷都以降に製作された「平安京式鬼瓦」であることを指摘している。氏の意見は傾聴すべき点が多く、「平安宮式鬼瓦」の定義については今後論を改める必要がある。
- 2 本報告では飛鳥～平安時代中期までの鬼瓦を取り上げたが、平安京式 X IV 式のみ平安時代後期に属する。
- 3 1 次調査では複数出土しており、全て同範照合されていないが、文様が極めて近似していることから、本報告では同範として報告する。
- 4 山中氏が提唱した「寺院系」は長岡京左京東院跡の報告の中で中島信親氏によって「離宮系」に改称され、その後、「離宮系」を 2 つに区別している。しかし、古閑正浩氏は中島氏が都城系としたものを「造宮使系」、離宮系 II 群を「勅旨所系」、離宮系 I 群を「乙訓寺系」・「内廷官司」・「系諸寺系」に再分類した。
- 5 平安時代前期は 8 世紀末～9 世紀中頃、平安時代中期が 9 世紀後半～11 世紀中頃、平安時代後期は 11 世紀後半～12 世紀後半とする。

参考文献

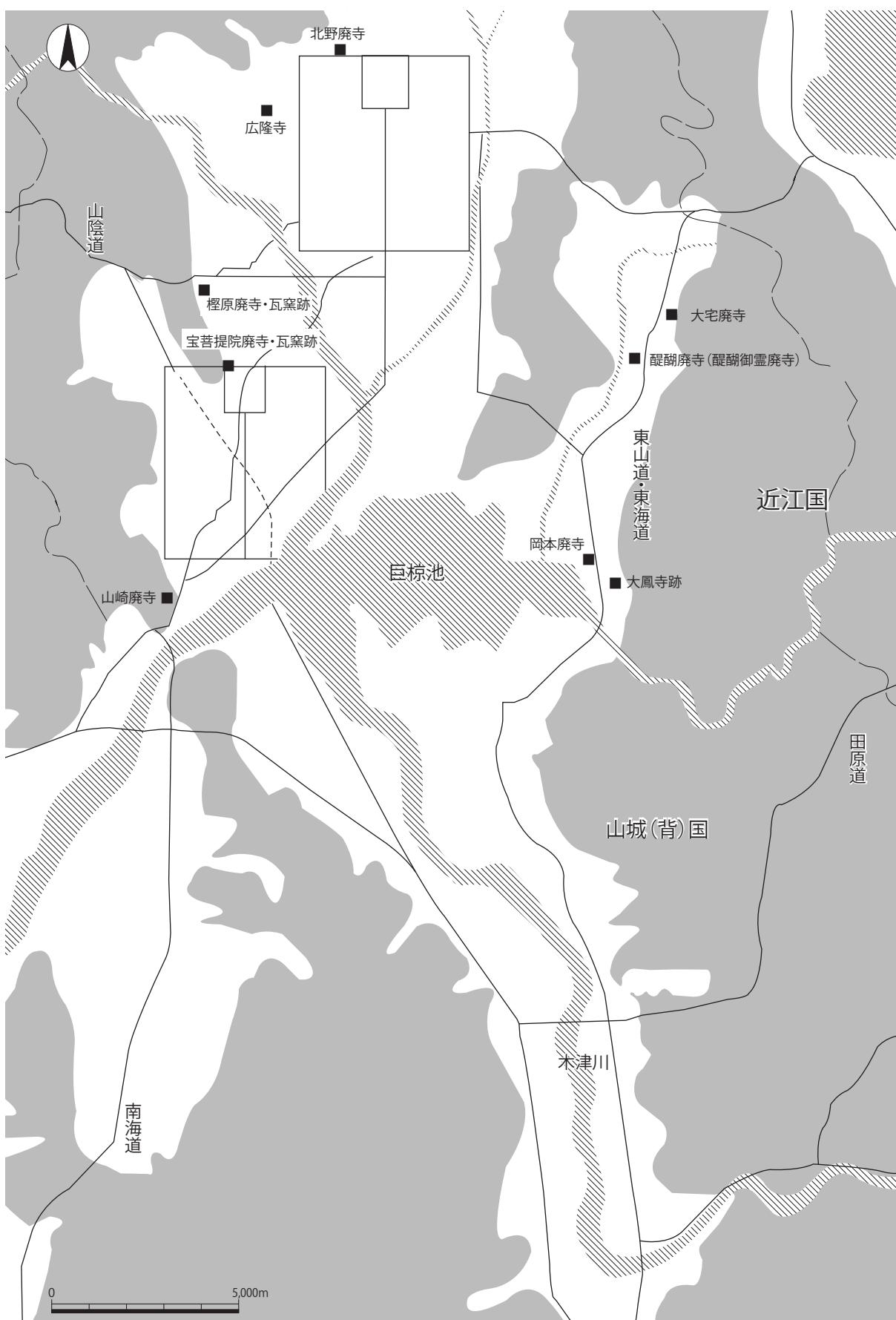
- 網野町誌編纂委員会 1992 「第二章古代」『網野町誌』上巻
- 網 伸也 1999 「大宅廃寺再考」『瓦衣千年森郁夫先生還暦記念論文集』森郁先生還暦記念論文集刊行会
- 網 伸也 2002 「軒瓦に現れた平安遷都の裏方たち」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会
- 網 伸也 2005 「大宅廃寺・大宅遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報平成 16 年度』京都市文化市民局
- 有光教一・坪井清足 1959 「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会
- 石尾政信 1982 「2 広隆寺跡」『京都府遺跡調査概報第 5 冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 上原真人 1984 『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』京都府教育委員会
- 上原真人 2020 「丹波国における律令成立期および盛期の寺院」『黒川古文化研究所紀要『古文化研究』第 19 号（公財）黒川古文化研究所
- 梅本康広 1997 「長岡京跡右京第 581 次（7 ANBNOI - 2 地区）～右京北一条二坊一町～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会
- 宇治市教育委員会 1987 - 1 「大鳳寺跡発掘調査報告」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 1 集
- 宇治市教育委員会 1987 - 2 「岡本廃寺・岡本遺跡」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 10 集
- 大山崎町教育委員会 2005 『大山崎町埋蔵文化財調査報告』第 25 集
- 久世康博 1998 「樺原廃寺跡第 4 次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 9 年度』京都市文化市民局
- 久世康博 2004 「樺原廃寺の再検討（上）」『研究紀要』第 9 号（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 纈纈文佳・上原真人ほか 2018 『神出窯跡群発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 古閑正浩 2010 「長岡京の造瓦組織と造営過程」『考古學雑誌』第 95 卷第 2 号 日本考古學會
- 小林 清 1966 「長岡京跡の出土瓦（難波宮・平城宮瓦との関係及び長岡宮窯瓦についての考察）」『長岡京の新研究 2』
- 近藤喬一ほか 1978 『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第 4 輯（財）古代学協会
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 『木村捷三郎収集瓦図録』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 2011 「42 北野廃寺」『昭和 52 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- （財）京都市埋蔵文化財研究所 2012 「71 北野廃寺 2」『昭和 54 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 佐藤興治 1967 「樺原廃寺発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
- 城陽市教育委員会 1973 「正道遺跡」『城陽市埋蔵文化財調査報告第 1 集』

城陽市教育委員会 1981 「久世廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 10 集』
鈴木久男 1995 「豊楽院跡」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊 (財) 京都市埋蔵文化研究所
杉山信三ほか 1967 「樅原廃寺跡の発掘調査概要」『佛教藝術』第 66 号 毎日新聞社
坪井清足 1958 「大宅廃寺の発掘」『佛教藝術』37 号 每日新聞社
中島信親 2002 「東院出土の「寺院系」長岡宮式軒瓦」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 55 集 (財) 向日市埋蔵文化財センター
中島信親 2004 「離宮系」長岡京式軒瓦の変遷について」『考古論考』川越哲志先生退官記念論文集
浪貝 穀 1972 『史跡樅原廃寺』京都市
長門満男 1991 「樅原廃寺・樅原遺跡・樅原廃寺瓦窯跡」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財発掘調査概報』(財) 京都市埋蔵文化財研究所
新倉 香 1999 「「蓮華文」が語るもの一宝菩提院廃寺出土蓮華文鬼板から一」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
新倉 香 2001 「宝菩提院廃寺の造瓦技術の系譜について」『宝菩提院廃寺瓦窯跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第 48 集 向日市埋蔵文化財センター
林屋辰三郎ほか 1973 『宇治市史 1 - 古代の歴史と景観 - 』宇治市役所
平方幸雄・菅田 薫 1988 「大宅廃寺」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所
平安博物館編 1977 『平安京古瓦図録』雄山閣
星野猷二・宇佐晋二 2004 『器瓦録想』伏見城研究会
堀 大輔 2010 『飛鳥白鳳の甍一京都市の古代寺院一』京都市文化財ブックス第 24 集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
毛利光俊彦 1980 「日本古代の鬼面文鬼瓦 - 8 世紀代を中心として - 」『研究論集 VI』奈良国立文化財研究所学報第 38 冊
山中 章 1979 「長岡宮（京）跡立会調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 5 集 向日市教育委員会
山中 章 1986 「長岡宮式軒瓦と寺院の修理 - 延暦十年の山背国浮圓の修理を巡って - 」『古瓦図考』山本忠尚
1998 『鬼瓦』（日本の美術 12 第 391 号）至文堂
吉崎 伸 2005 「II 小野瓦窯」『京都市内遺跡発掘調査概要平成 16 年度』京都市文化市民局

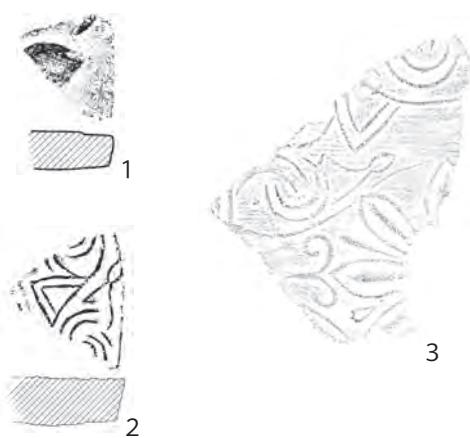
図版出典

第 1 ・ 12 ・ 19 ・ 20 図：筆者作成。
第 2 図 1 : 綱 2005。2 : 平方 1988。3 : 堀 2010。
第 3 図 : 坪井 1958。
第 4 図 : 星野 2004。
第 5 図 : 宇治市教育委員会 1987-2。
第 6 図 : 宇治市教育委員会 1987-1。
第 7 図 : 石尾 1982。
第 8 図 : (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2012。
第 9 図 1 : (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996。2 : 久世 1998。3 : 梅本康広 2001 『宝菩提院廃寺瓦窯跡』向日市埋蔵文化財調査報告書第 48 集 向日市埋蔵文化財センター。
第 10 図 - 1 ~ 3 : 梅本 2001。
第 11 図 : 大山崎町教育委員会 2005。
第 13 図 : 肥後弘幸ほか 1993 「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成四年度発掘調査概要 [堤谷窯跡群]」『埋蔵文化財発掘調査概報一九九三』京都府教育委員会。
第 14 図 : 小山元孝・橋本勝行 2005 「俵野廃寺の鬼瓦について」『太透和考古第 23 号』両丹考古学研究会。
第 15 図 1 : (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1980 『坂東善平収蔵品目録』。2 : 城陽市教育委員会 1993 「正道官術遺跡」『城陽市埋蔵文化財調査報告書 24 集』。3 : 鷹野一太郎 2010 「普賢寺」『南山城の古代寺院』同志社大

- 学歴史資料館調査研究報告第9集 同志社大学歴史資料館。4：城陽市教育委員会 1973「平川廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告第1集』。
- 第16図1～3：上原 1984。4：城陽市教育委員会 1981「久世廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第10集』。
- 5：城陽市教育委員会 1974「平川廃寺」『城陽市埋蔵文化財調査報告第2集』。
- 第17図1・2：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2012。3・5・6：上村和直 1981『南春日町遺跡発掘調査報告 昭和55年度』(財) 京都市文化財保護課。4：(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996。
- 第18図1：宮原晋一ほか「長岡宮跡第137次(7AN12E地区)～北方官術(南部) - 推定大蔵～ 発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第17集』向日市教育委員会。2：松崎俊郎ほか 2001「9 長岡京跡左京第300次(7ANEMD地区)～左京二条二坊五・六・十一・十二町、二条条間南小路・東二坊坊間小路交差点～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第53集』向日市埋蔵文化財センター。
- 第21図：藤田さかえほか 1987「長岡京の瓦」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会。
- 第22図：近藤喬一ほか 1978。
- 第23図-1・2：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第24図：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第25図：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第26図：鈴木 1995。
- 第27図：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第28図：近藤奈央 2017『史跡教王護国寺境内史跡等登録記念物歴史の道保存整備事業報告書』宗教法人教王護国寺。
- 第29図-1・2：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第30図：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第31・32図：内田好昭ほか 2021『令和2年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書小野瓦窯出土品』京都市文化市民局。
- 第33・34図：青山均・長谷川行孝 1984『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会。
- 第35図-1～3：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第36図1：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)、2：引原茂治 2014「(2) 美濃山瓦窯跡群」『京都府遺跡調査報告書第160冊』。
- 第37図：吉村正親 1996「北白川廃寺塔跡」『京都市内遺跡発掘調査概要平成7年度』京都市文化市民局。
- 第38図：筆者撮影(京都市埋蔵文化財研究所蔵)。
- 第39図：岩戸晶子ほか 2000「高井手瓦窯跡」『京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書第23集』山城町教育委員会。
- 第40図：筆者撮影(京都文化博物館蔵)。
- 第41図-1・2：筆者撮影(京都文化博物館蔵)。

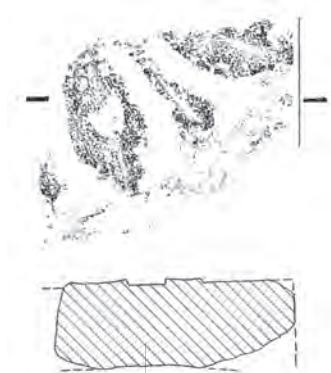


第1図 白鳳期鬼瓦出土地点 (1:15,000)



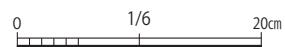
第2図 大宅廃寺出土鬼瓦（1：6）
(1：1類 2・3：2類)

第3図 大宅廃寺出土鬼瓦復元図（1：8）

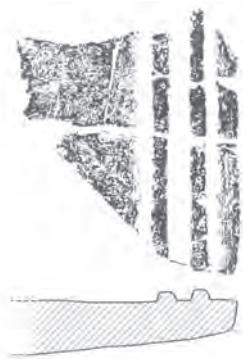


第4図 醍醐廃寺鬼瓦（1：6）

第5図 岡本廃寺出土鬼瓦（1：6）
(1：1類 2：2類)

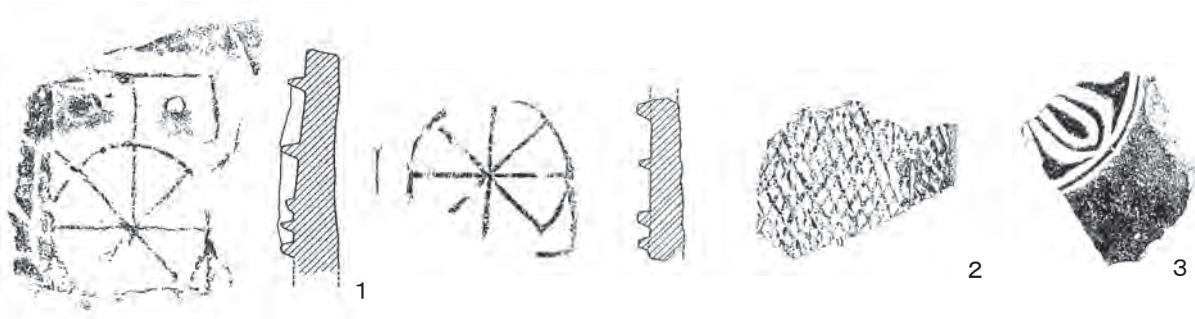


第6図 大鳳寺跡出土鬼瓦（1：6）(1：1類 2：2類)



第7図 広隆寺出土鬼瓦（1：4）

第8図 北野廃寺出土鬼瓦（1：6）

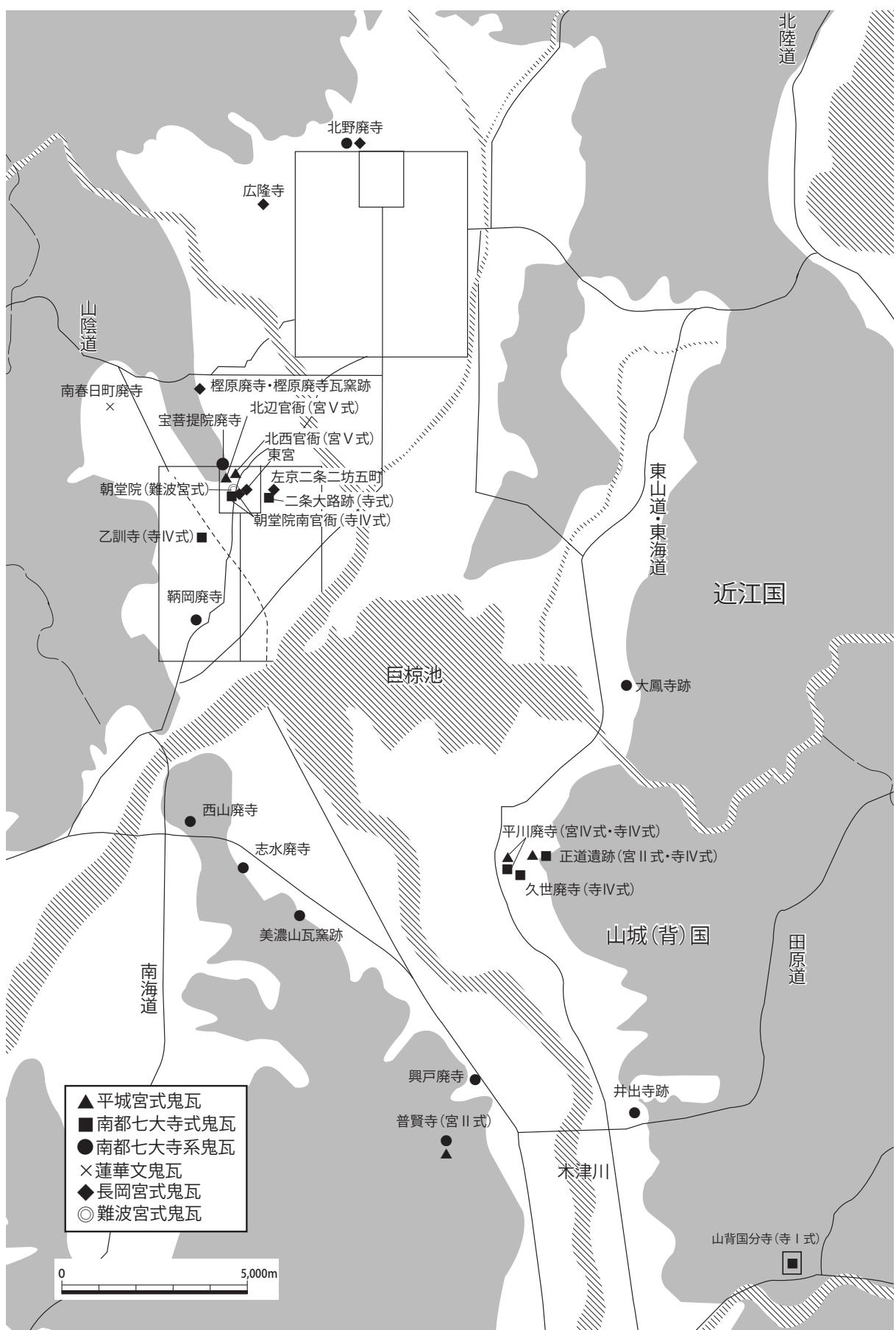


第9図 檻原廃寺・瓦窯跡出土鬼瓦（1：6）（1・2：1類 3：2類）

第10図 宝菩提院廃寺・瓦窯跡出土鬼瓦（1：6）



第11図 大山崎廃寺出土鬼瓦（1：6）



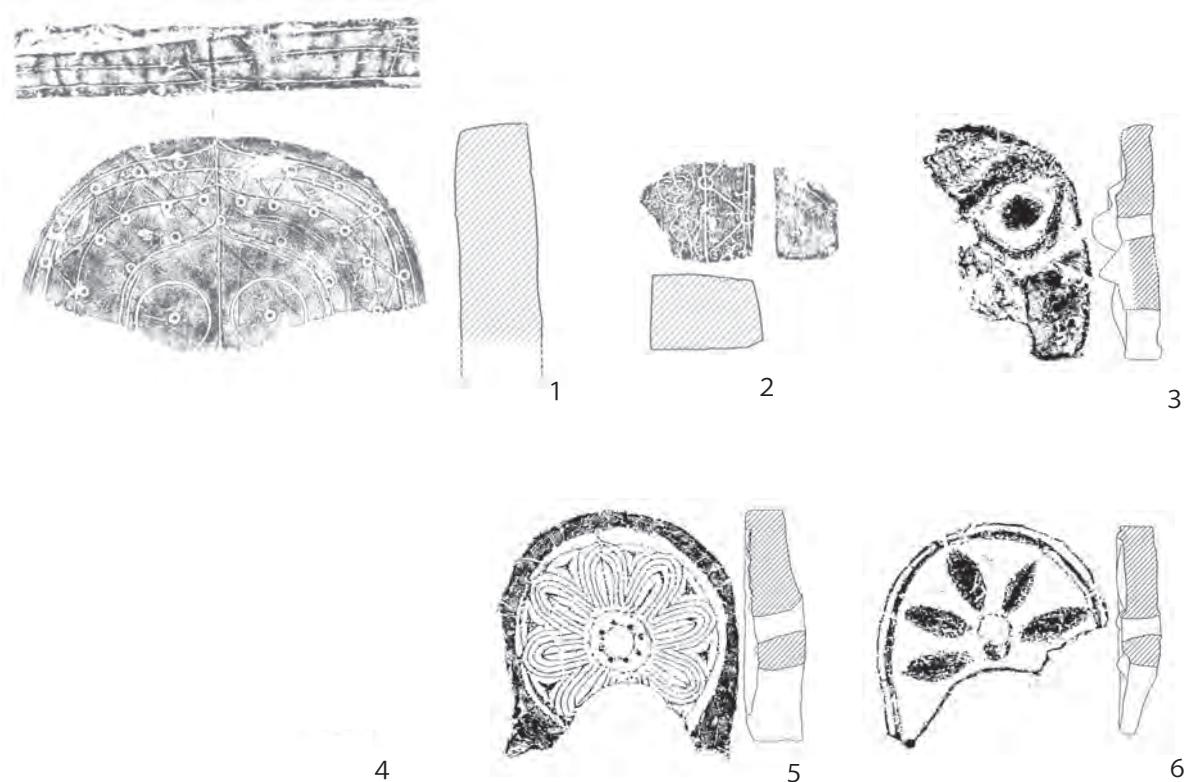
第13図 堤谷窯跡出土鬼瓦（1：6）

第14図 俵野廃寺出土鬼瓦（1：6）

第15図 平城宮式鬼瓦（1：6）

（1：井出寺跡 2：正道遺跡 3：普賢寺 4：平川廃寺）

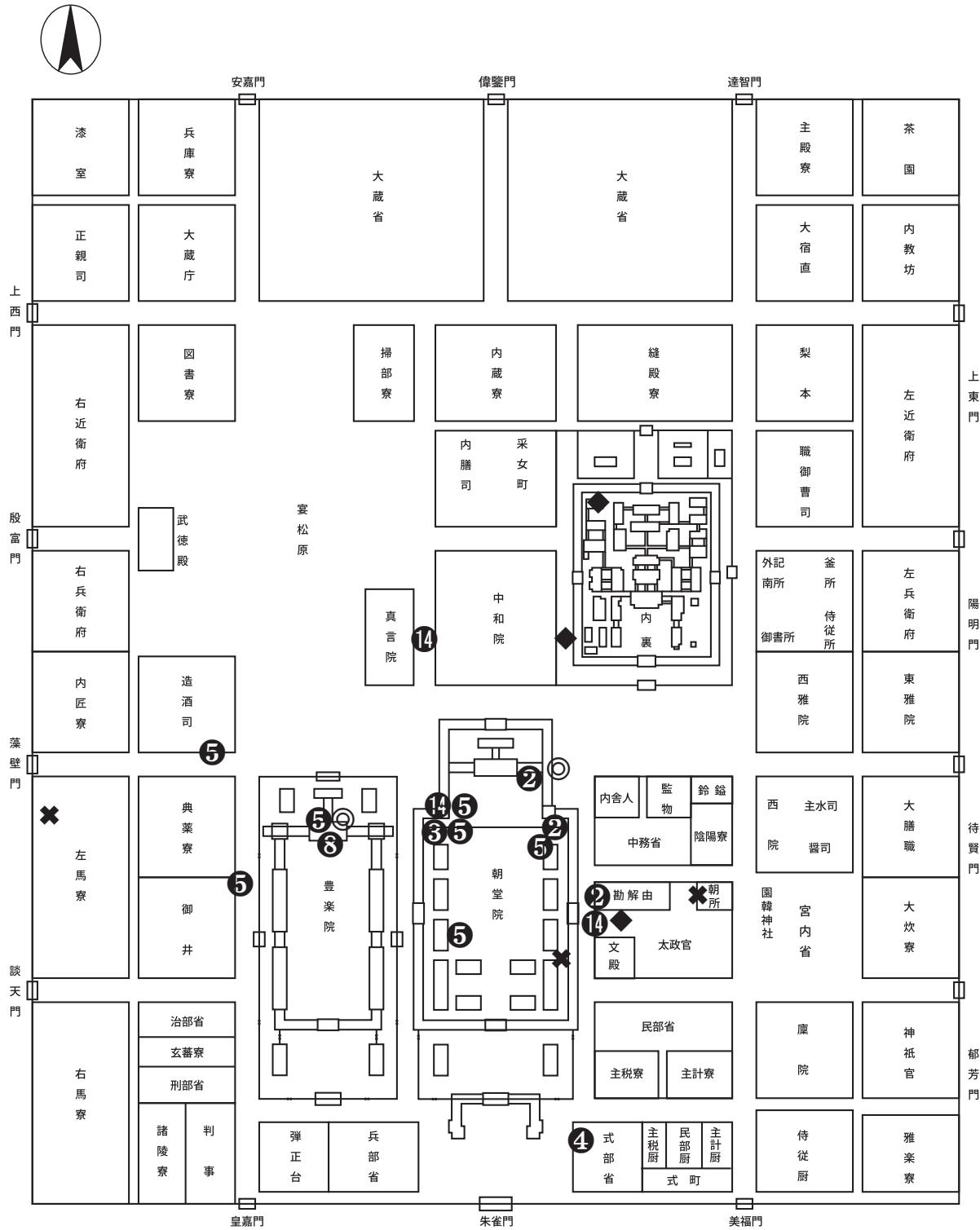
第16図 南都七大寺式鬼瓦（1：6）（1～3：山背国国分寺 4：久世廃寺 5：平川廃寺）



第17図 南都七大寺式系鬼瓦・蓮華文鬼瓦（1：6）
(1・2：北野廃寺 3・5・6：南春日廃寺 4：兔道遺跡（大鳳寺跡）)

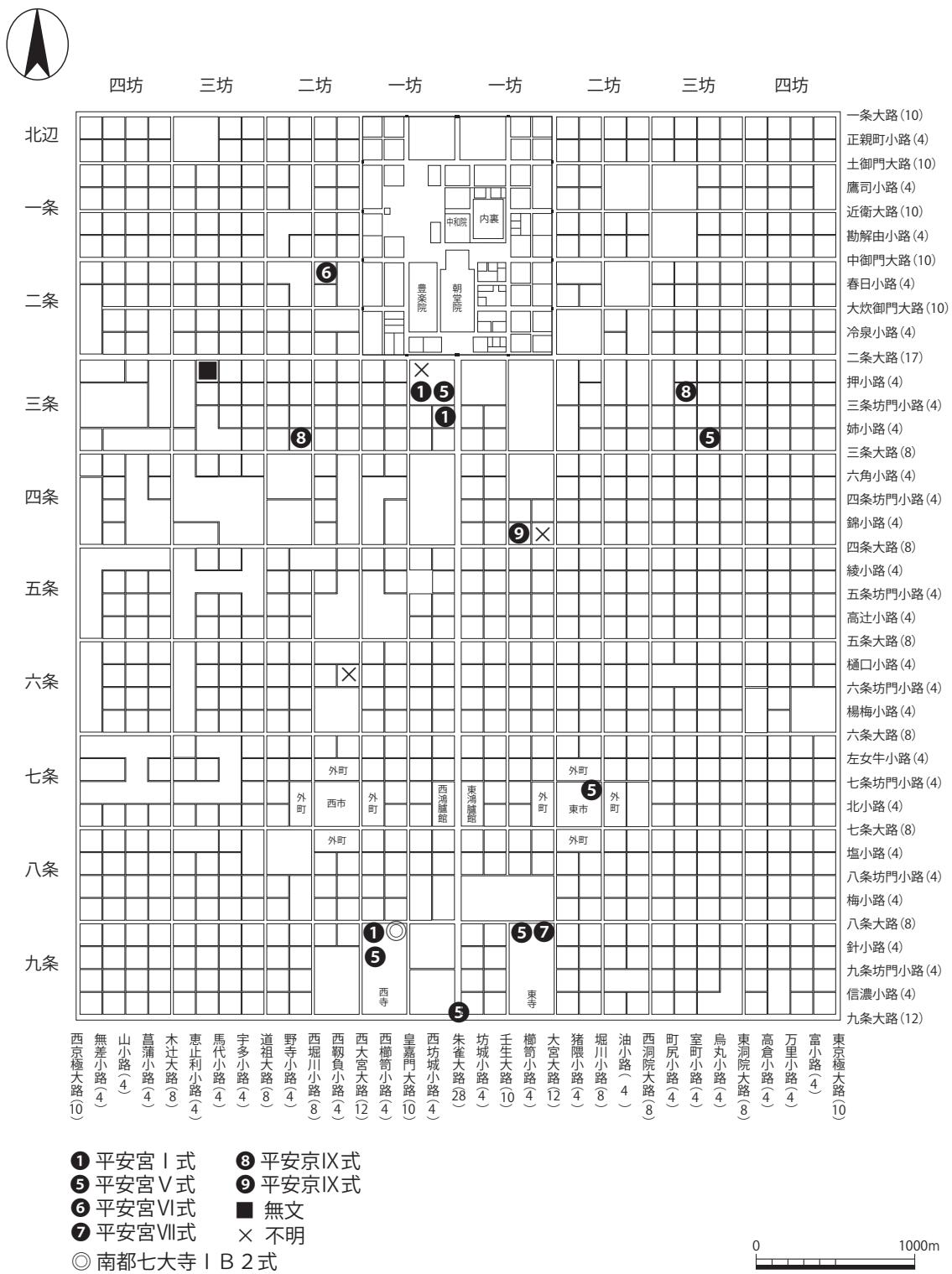


第18図 長岡宮・京跡出土鬼瓦（1：6）（1：長岡宮北辺官衙 2：長岡京二条大路南側溝）



- | | | |
|---------|------------|--------|
| ① 平安宮Ⅱ式 | ⑧ 平安宮VIII式 | ◆ 再利用 |
| ③ 平安宮Ⅲ式 | ⑭ 平安宮XIV式 | ✗ 型式不明 |
| ④ 平安宮Ⅳ式 | ◎ 三彩鬼瓦 | |
| ⑤ 平安宮Ⅴ式 | | |

第19図 平安宮内鬼瓦出土地点 (1:400)



第 20 図 平安宮内鬼瓦出土地点 (1:4,000)



第21図 長岡京式鬼瓦（1：6）
(長岡宮朝堂院南面築地回廊跡)



第23図 平安宮II式
(1：朝堂院跡 2：西賀茂瓦窯跡)



第24図 平安宮III式
(平安宮龍尾壇跡付近)



第26図 平安宮V式（1：6）(豊楽殿跡)



第25図 平安宮IV式
(平安宮龍尾壇跡付近)



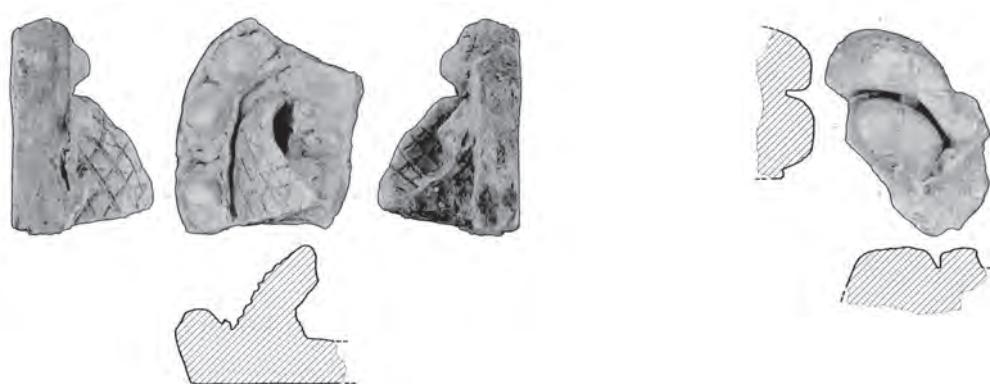
第27図 平安宮VI式（右京二条二坊八町跡）

第28図 平安宮VII式（1：6）（東寺）



第29図 平安宮VIII式（1：太政官跡 2：豊楽殿跡）

第30図 平安宮IX式
(左京四条一坊十二・十三町跡)



第31図 平安宮X式（小野瓦屋）

第32図 平安宮XI式
(小野瓦屋)



第33図 平安宮 XII式 (池田瓦窯跡)



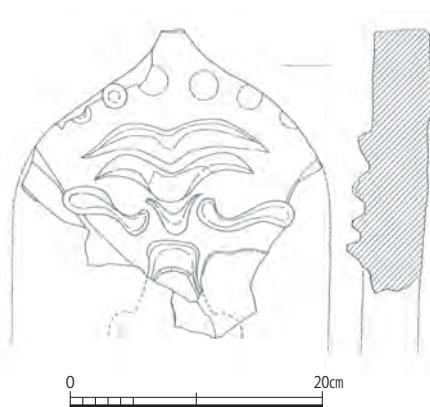
第34図 平安宮 X III式
(池田瓦窯跡)



第35図 三彩鬼瓦
(1: 豊楽殿跡 2: 仁和寺 3: 大極殿跡)



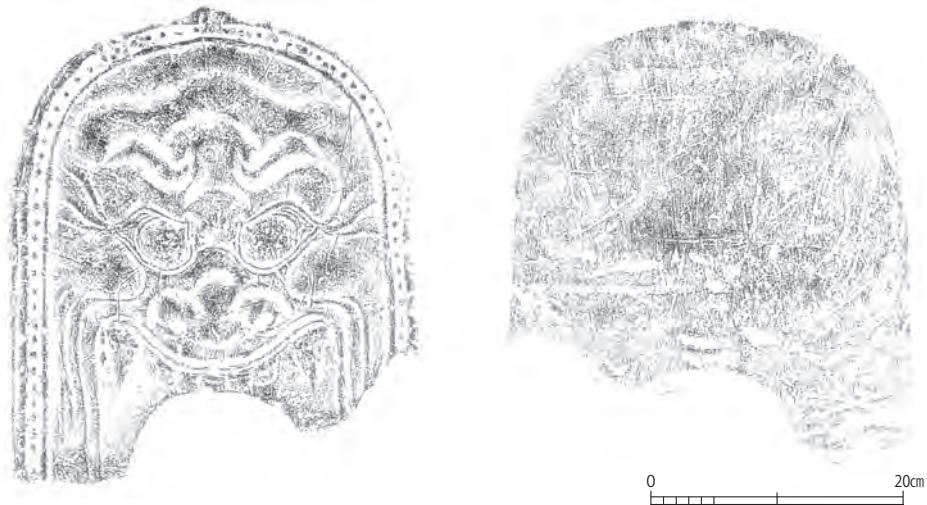
第36図 無文鬼瓦 (1: 6) (1: 右京三条三坊十四町跡 2: 美濃山瓦窯跡群)



第37図 北白川廃寺出土鬼瓦（1：6）



第38図 西寺跡出土鬼瓦（南都七大寺ⅠB2式）



第39図 高井手瓦窯跡出土鬼瓦（1：6）

第40図 平安京XIV式（平安宮龍尾壇跡付近）

第41図 平安京XIV式
(1:平安宮龍尾壇跡付近 2:中和院跡隣接地)